



第2回国際シンポジウムにむけて

An Invitation to the Second International Symposium on Nonwritten Cultural Materials

画像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く

Interpreting Human Culture through Nonwritten Materials :
Perspectives on Illustrated Material, Folk Implements and Landscape



大里 浩秋 OSATO Hiroaki・的場 昭弘 MATOBA Akihiro
金 貞我 KIM Jeong Ah・河野 通明 KONO Michiaki
八久保 厚志 HACHIKUBO Koshi・北原 糸子 KITAHARA Itoko

まず、各セッションの見通し、希望、PRなどをお話し
いただきたいのですが、国際シンポジウム実施委員会
委員長の大里先生から前置きをお願いいたします。



大里 実施委員会が2月に発足して以
来準備を進めてきたのですが、ここに
集まっておられるコーディネーターを
中心にして4つのセッションの報告者と
コメンテーターを選んでいただいて、
だいたい形が出来た段階なんです。去
年の第1回が外部の研究者の問題提起を受けて学び考
える場であったので、今度の第2回のシンポジウムでやる
べきことというのは、各班、各テーマで3年余り組んできた
私たち大学のメンバーでこれまでの成果を報告してゲ
ストや参加者の批判を仰ぎ、全体で意見を交わして、私
たちが目指してきた非文字資料研究を人類文化研究の中
に位置づける可能性をより確かなものにできればと考えて
います。



的場 私はセッション1「非文字資料を
めぐる方法論的諸問題」を担当してい
ます。私は昨年のシンポジウムで方法
論的位置づけと、それを具体的にデジ
タル資料としてどう入れるかという問
題を課題としたセッションを担当しま
した。今年から第6班として理論総括研究班が立ち上がり
ました。これは画像、景観、身体技法をそれぞれどう理
論的にまとめていくか、およびそれを前提にして、どう

体系化していくかという方法論的問題を扱っています。
これはとても大変な作業です。今回予定しておりますフ
ランス、リヨン大学のアラン＝マルク・リュ先生は、哲
学およびデジタル化にもたいへん詳しい方です。すでに
リヨン大学はカリフォルニア大学パークレー校と組んで
画像資料の実験展示も行っているようで、そのようなこ
とも含めて実践的な側面とそれをさらにどのように発表
するかという側面を話していただく予定です。具体的な
タイトルは、「デジタル人類学・マルチメディア環境のため
のデジタル資料」です。私は、自分の専門分野に近い
んですが方法論的なヒストリオグラフィー、歴史方法論
の問題だとか、あるいは純粋に哲学的な諸問題を検討し
ながら報告しようと思っております。コメンテーターに
は、本プログラムのサブリーダーの橘川俊忠先生に引き
受けていただくことになっています。



金 セッション2のテーマは画像資料で
す。画像を生活文化研究のために資料
化することは、今までCOE1班が取り
組んできた課題でした。資料化の具体
的な目標は「絵引」の編纂で、日本常
民文化研究所の研究成果である『絵巻
物による日本常民生活絵引』を継承しながら、新たに日
本近世編の生活絵引を作成する一方で、対象地域を東ア
ジアにも広げ、中国編、韓国・朝鮮編の絵引を作ること
を目指しています。セッションの具体的なタイトルを「図
像のなかの暮らしと文化 日本と東アジアの近世」とし
たのは、日本近世編・東アジア編絵引編纂の過程とその

朝鮮時代「平壤監司饗宴図」(韓国 国立中央博物館蔵)

Our symposium consists of four sections.
Each section has its own theme.
And at the end of the symposium, we will bring together the information
and discuss the relationship between the four themes.

成果は勿論、図像資料を読み解き、資料として活用するまでの一連の研究手法を今回のシンポジウムで紹介したいと考えたからです。

セッションの前半では、まずCOEの研究メンバーから報告を行います。福田アジオ先生が資料集としての絵引編纂における理論的な方法や意味について報告し、次に日本近世編を担当している田島佳也先生から加賀地方の農書である『農業図絵』を取り上げ、そこから読み取れる近世の暮らしについて報告して頂きます。そして東アジア編としては、台湾、中央研究院の王正華助研究員が中国の風俗画にみる都市文化について、そして私が韓国・朝鮮編の絵引編纂についてご報告いたします。特に絵引編纂資料の中心をなす朝鮮時代制作の風俗画に対する検証の過程と絵引編纂の実例を取り上げながら、図像から読み取ったメッセージを分析することが主な内容になります。セッション2の後半は、ブリティッシュコロンビア大学のジョシュア・モスター先生とハイデルベルグ大学のメラニー・トレーデ先生の御二方をコメンテーターとしてお招きし、コメントをいただくことになっています。日本中世の文学・文化史をご専門とするモスター先生と明・清時代の中国絵画資料に精通しているトレーデ先生は、現在、欧米の図像資料研究分野の第一線で活躍されており、神奈川大学COEの絵引の編纂について、適切で刺激的なコメントをいただけることと期待しています。



河野 セッション3は「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」というタイトルを掲げました。このテーマの立て方からお話したいと思います。我々は「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という大きな看板を掲げているわけですが、いまなぜ非文字資料なのかと問い直すと、20世紀の後半に地球科学と生命科学が大進化をとげて、地球の進化と生命の進化がお互いに影響しながら展開してきたということが大変はつきりしてきました。この地球と生命の共進化という体系の末端に、人類史をどう^な織り込むかということが21世紀の我々の抱えている課題

であろう、そのためには射程距離の長い非文字資料を使って人類文化を解明しようという意気込みの表明が「人類文化研究のための非文字資料の体系化」なのだと思っています。

ところで文化というのは人類がある環境の中で生活していくために生み出すもので、人は裸のままでは環境の中で生活できませんので、人類と環境とのクッション材として衣服や住居や弓矢や鋤などの文化を生み出していくものですね。その点で言えば自然が規定的な意味を持



韓国



中国

韓国犁は三角枠で無床犁、中国犁は四角枠で長床犁
(韓国 全羅南道農業博物館)



第2回国際シンポジウムにむけて

っていて、ほとんど自然決定論でいいと思うんです。ところが現在我々が見ている文化は、その土地で生み出されたとは限らない。なぜなら人類は民族移動を繰り返していますので、よその土地で形成された文化が民族移動にともなって違った環境に持ちこまれたという現実があるわけです。20世紀の大きな成果であった照葉樹林文化論は、その点のチェックを欠いている。いま照葉樹林帯で生活している人々の文化は、その環境で生み出されたとは限らないわけです。この弱点を克服しながら21世紀に新たな展開をしていくためには、アジア規模で展開されてきた民族移動の解明が重要な意味を持つてくるわけです。

ところで文字資料は人間社会内部の記録が中心ですし、時代をさかのぼれば資料が希薄になってくる。そこで民具の犁に注目したんです。犁は牛馬に引かせて土地を耕す畜力耕耘機ですが、これは形が容易に変化しないことがわかってきました。日本の犁は朝鮮半島や中国から伝わってきたものですが、いま各地の博物館・資料館の収蔵庫で大正・昭和期の在来犁を見ましても、朝鮮系か中国系かそれらの混血型かが容易に見分けがつくのです。つまり20世紀の民具から6~7世紀の歴史情報が引き出せるのです。犁は中国では戦国時代に登場しますので、東アジア全域で犁の形態比較をやれば、過去2500年間のアジア規模の民族移動が復原できるであろう、というのがセッション3のねらいです。

そこで報告者は、中国はたびたびの現地調査で民具と考古資料の両面から犁耕史を追っておられる東海大学の渡部武先生、韓国は民俗調査・農具研究の大家で仁荷大

学校名誉教授の金光彦先生、日本は26年来各地の資料館を回って朝鮮系・中国系・混血型の読み分けを進めている河野が担当、コメンテーターは中国、雲南大学の尹紹亭先生です。



八久保 私どものセッション4は「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」というタイトルで行うことにしました。的場先生にお話していただいたように今回われわれが本プログラムにどのように寄与できるか

と考えた場合、より具体的な資料と経験といったものを提示しようということで、空間編成とつけてありますが、空間編成という言葉は人文地理学で使われている言葉で、主に景観などの変化に対する各主体の問題、ヒトであるとか社会組織であるとか資本・企業であるとか政治的意思だとか集団の意思であるとか、そのようなものが如何にして景観に影響を及ぼすかということです。このようなテーマにしたのは、われわれ3班が基本的には日本常民文化研究所所蔵の渋沢フィルムの跡づけといいますが、履歴を洗うといった作業を行おうとしていて、景観認識についてどのように捉えるか、人間が環境にどのような刻印を押してきたかということを考えるセッションですので、われわれ報告者やコメンテーターの専門である地理学の考えを提示してみたいと思います、またそれに対してご意見やご批判をいただければと思っているからです。具体的な報告テーマとスタッフについてご紹介させていただきますと、佐賀大学の藤永豪さんはこの神奈川大学COEで育った研究者ですが、「景観分析における資料と





しての写真の可能性」ということで共にこのテーマを追っかけてきました。それから桜美林大学の浜田弘明先生と一緒に韓国で2年かけて現地調査をおこない、その具体的な事例について紹介していただきます。次にコメンテーターですが、平成国際大学の鄭美愛先生と神戸流通大学の奥野志偉先生のお二人にお願いしました。ご両人は、韓国や中国の都市や農村地域の構造や景観変化に造詣の深い研究者です。

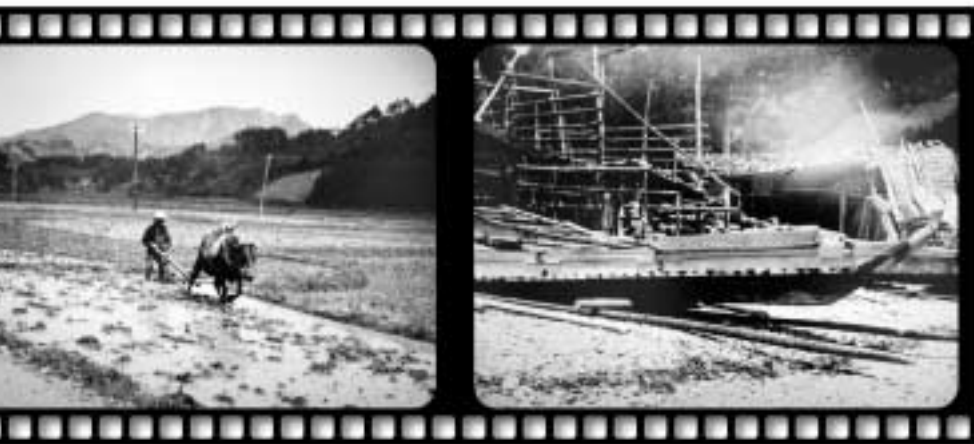
外部評価では体系化の視点がないとの指摘もありました。今回のシンポジウムの場合にはそこをある程度視野に置いて全体をコーディネートされるのか、それともそれ以前の各部門の充実を期すというところを当面の目標とするものなのか…。大里先生如何でしょうか？

大里 今おっしゃったことは両方やらなければならないんですが、ただ一回目と違って今年というのはあと来年しかない訳で、今年と来年で何ができるか、何を目標かを定める必要があります。3年余やってきたことが必ずしも全体化していない、自分のところの研究に終始して

いる、という現状でいえば、各セッションでは、今取り組んでいてここまでは考えたという内容をまず説明することが大切です。そして、それにプラスして、各セッションで報告された中身からどういうことをお互いが共有化すべき課題として取り出せるかを、二日目の最後の総合討論の場で語り合いたいと思います。その意味で総合討論はとても重要だと考えており、その司会を北原先生にお願いしました。



北原 今のそれぞれのお話を伺っておりますと、これまで遂行してこられた問題、あるいはそれぞれの目標としたテーマについてお伺いできたわけですが、今年のシンポの課題は神奈川大学COEの掲げるテーマの全体像構築へ向けて相互の連関がみえる形にすることだと思われま。その点でいえば、少なくとも「体系化」という到達点を示すことは最後の年の課題としても、本年度はそれへ向けての共通項をそれぞれの追究するテーマのなかに太い柱として自覚的に打ち立てていただくことではないかと思。司会者としては、それぞれのセッションのコ



上下とも 日本常民文化研究所所蔵の「澁澤フィルム」より



第2回国際シンポジウムにむけて

ーディネーターの方々とはその助走のための討論を積み重ねて、シンポジウムにご参加いただく海外のコメンテーターの方々の広い視野からのご意見を有効に生かす道筋を付けたいと考えています。

的場 私たち理論班は毎月いろんな班の報告を聞いています。画像のほうでは鈴木陽一先生、田島佳也先生にお話をお聞きしました。身体技法では廣田律子先生、河野通明先生。環境のほうはまだお聞きしていません。一つの班においても、たとえば画像の班でも必ずしも統一がとれてないと思います。たとえば田島先生の画像の読み方は文字資料から読むという方法ですね。一方、鈴木先生は画像のほうから文学的に読む。COEの研究としては、画像のほうから読むのが筋なんだろうが、研究者はそれまでのご自分の研究スタイルの中でどうしたらいいか苦労しているところだと思います。とはいえ一つの班の中で方法を統一して欲しい。たとえば、金貞我先生は美術史の専門家、田島先生は文字資料、歴史学の専門家、鈴木先生は文学の専門家、蝦夷地なら蝦夷地、本州なら本州の資料をみんな交替でみて、統一的な話をつけてもらえばいいかなと思っているんです。今は国別、地域別に分かれて、それぞれのやり方でやっていると思うんです。そのあたりで少々つめてもらえればいいのかなど、伺っている範囲で考えています。身体技法の場合でも、河野先生にお聞きする限り身体のほうが見えてこないという感じがあるんです。身体と民具、この二つをそれぞれ

れ統合して一つの班の中での摺りあわせをすべきだと感じています。私ども理論班としては、身体技法、画像、景観の三つをどう統一化するかよりも、それぞれ内部での摺り合わせをして欲しいと思っております。大変僭越な言い方かもしれませんが。しかし全体を見渡せるというのは私たち理論班だけですから、無礼を承知で何らかのコメントや調整をつけようとして動いています。これをシンポジウムの中に反映していかなければならないと思っております。

金 画像資料を読むための理論的分析枠が必要であるという点については、私も共感いたします。COE1班では東アジア絵引編纂資料の一つとして18世紀の中国・蘇州を描いた「姑蘇繁華図」を取り上げ、その分析に取り組んでまいりました。「姑蘇繁華図」の景観描写に即して蘇州の現地調査を行いました。その描写が画家の目を通して描きとめられた景観であるにもかかわらず、非常に写実的的確であることに驚きました。このような意味では、景観の変化を考える上で絵画資料を含む画像資料も写真資料に劣らない、有効な資料であると思います。

的場 要するにそれぞれの専門家がいらっしやいますよね、文字資料、美術史、文学、この御三方の知恵をすべての分野に生かせばいいじゃないかということです。最初から日本の画像資料は写実的である、写実的なので美術史の方の参加は不要だというのはなく、同じ資料を廻しながら、議論をやりながら全体を見渡せればいいのかではないでしょうか。分業化されていますよね。

八久保 さっきの河野先生のお話で文明史的に農具を捉えそれを日本や東アジアで検証するというやり方は、我々がやっている手法、地理学的分布からやって全体系、地球全体を考えるというやり方に近いものですから、伺っていてとても分かりやすかったということがあります。そういう点で考えてみますと、景観にしる、画像資料の読解にしる、的場先生がおっしゃったように各々の空間スケールを限定していく、もしくは拡大をしていってその中から理論、体系を考える。そうすると東アジアであるとか、中国、韓国、つまりネーション ステート(nation state)であるのか、中国文化圏なのか、どのスケールで考えるかがテーマについて最良なのかということも明らかになってくるだろうし、あるいは日本が植民地支配をしていた時代の拡大した日本領域にどのような問題と痕跡を残したかということが明らかになってくると思いま



す。ですから本プロジェクトをオーソライズする一つの考察手段としてこの空間スケールの問題を少し議論させていただければありがたいと思っております。それと先ほどお話にあった時間軸と空間軸というものを整理しておかないとせっかくのこのような実績、業績が次の世代につながっていかないのではないかと考えております。あくまで地理学から見たものなのですが、空間スケールを議論に入れてもらいたいというのが私の提案です。

金 画像資料を活用した歴史研究は、特に文化史の領域では、最近、世界的にみても非常に活発になってきた観があります。例えば、パークレイ大学では19世紀から20世紀初頭の写真資料を利用した“Shanghai in Images : A Historical Photographic Database(1840-1949)”という歴史研究に取り組んでおり、非文字資料研究として世界的に評価されています。また、マサチューセッツ工科大学は、明治時期の日米関係の始まりを取り上げた“Commodore Perry and the Opening of Japan (1853-1854) Black Ships & Samurai”というデータベースを公開しましたが、これにも多くの画像資料が取り上げられています。また、台湾でも、中央研究院若手研究者を中心に中国の絵画資料から生活文化を語る研究が盛んに行われています。このような動きを考えますと、中世の生活文化研究を画像資料から求めた『絵巻物による日本常民生活絵引』は、非常に先駆的な試みであったと改めて認識させられます。そして、日本近世の画像資料の中心は一連の「洛中洛外図」でした。近世の京都とその周辺を描いた「洛中洛外図」は、京都の文化や風俗だけではなく、都市空間や景観の研究にも有効な手がかりを提供してきたと思います。

八久保 現在の画像資料がマテリアルとして写真であるとか映像資料であるとすれば、この写真等が明治時代の写真と同じような手法で利用出来るとお考えですか？

金 画像資料は画家の創意というフィルターを通して人為的に描いたもの、写真は写し手を通して機械が記録したものですから、資料として取り上げる際には当然、作爲が働く過程を検証することが要求されると思います。

八久保 しかし写真が真実を写しているかどうかというのは疑問ですね。

北原 写真に関してでは歴史的に見ると記録としての意味よりも、主流の流れとしては芸術としての流れが強いんですね。写真家のほうが何を切り取るかという問題と



して、現実を切り取るかということで芸術性を付与させてみていく傾向があります。だから災害写真なんていうのはまったく価値を置かれていないわけです。

的場 またつくる側と読む側、読む側がどのようにそれを読んでいくかという問題があります。

北原 その問題もありますね。

的場 ヨーロッパでも中世の神話や宗教というものを一般庶民がどう理解していったかという研究が多いのですが、写真や画像は相手にどう読まれるか、作る側と読む側で読む側の研究が展開されればかなり新しい側面が見えてくるということになります。

八久保 全体として広告や情報伝達やプロパガンダのマテリアルとして画像が写真に変わったとして捉えるのか、または写真はそれらとは全く別物として登場したのかには注意が必要だと思います。

金 画像資料における写実表現は、物事があるがままにスケッチしたものを意味しているのではありません。特に、東洋美術における写実表現や風俗表現はフィクションの世界をイメージ化しているものが大部分です。画家が写実的な風景や人間の営みを克明に描いていても、それは、フィクションの世界をリアルに演出するために意図的に用いたものである場合が多いのです。その表現は、迫真性を持たば持つほどフィクションの世界をリアルな



第2回国際シンポジウムにむけて

『絵巻物による日本常民生活絵引』の図より（日本常民文化研究所所蔵）

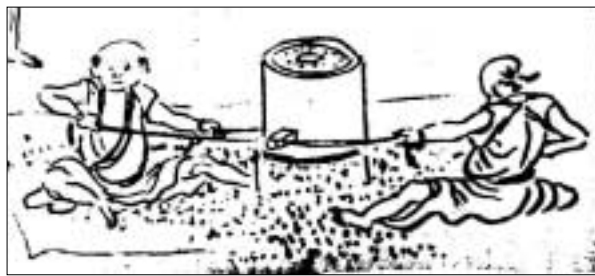


世界に押し上げて展開させていきます。同時代の人々が図像の伝えるイメージを共有できる、という前提が成り立つのであれば、絵画などの図像資料には実写に劣らない写実性と記録性があると思うのです。

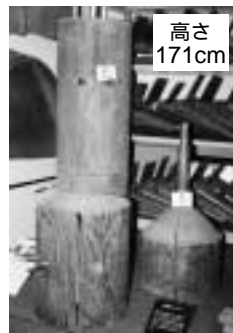
北原 写真が必ずしも記録性に富んでいるということはありません。その前提で、そこは動かないものとして論じてしまうとなかなか問題が大きいと思います。そこにあったことは事実だけど、それは切り取る側のまなざしで切り取っているのだから、記録は記録なんだけれども、絵画の記録と同じ記録とはいえない要素もあるので、その辺も含めて分析すれば渋沢写真の問題も関係してくると思います。

河野 では一言だけ。的場先生から私の報告に身体のことが見えにくいというお話があって、その通りなんですけど、身体技法というのはある環境のなかで暮らし続ける中で、環境への適応として身につくものと考えられます。ところが人類史には民族移動がたびたびあって、別の環境に移った場合に、もう身体は固まってしまって身体技法はいまさら変えられない、だから変わらないということがあり得ます。たとえば日本人の座位姿勢についても、おそらく日本列島に渡ってくる前に身に付いてしまった可能性も考えられる。そうであればある地域の人々

図像・民具に刻印された身体技法



座位の初摺白（関西：堀家本「四季耕作図巻」）



立位の初摺白（青森県：（左）板柳町郷土資料（右）小川原湖民俗博物館）

の身体技法を、いま住んでいる環境との関係で説明する
 なら、それは資料批判なしに文献史料を扱うのと同等の
 危険がある。だから日本文化の解明のためにまず東アジ
 アの民族移動を復原して、日本列島の民族分布を確定す
 るところから始めようとしているわけです。その一方で、
 年報1号で報告しましたように、木摺臼^{きずるす}の作業姿勢を通し
 て民族分布を復原する具体的な作業をすすめています。
 八久保 例えば農業などの耕作限界を求めて民族が移動
 することになる、同じ環境を求めていくなれば身体技
 法も移動先では変わらないということになりますか。

河野 おそらく民族移動するときは選べない、生きるた
 めにどこでも生きられるところに行く。違った環境であ
 っても行き先がそこしかなければそこに行くわけです。

的場 河野先生が言われている民族移動の「民族」は近
 代の概念ですよね。もっと過去に遡ると、それはもっと
 素朴に言えば「部族」、部族移動のことですね。そこには
 「漢民族」とか「日本民族」という概念でなくて、部族が
 移動するということですね。私たちが現在使っている「民
 族」を読み取っているわけではないんですね。

河野 そうです。

金 非文字資料を文字資料の対立概念として捉える必要
 はないと思います。先ほどの場先生がおっしゃったよう
 に、非文字資料研究から文字資料を排除しようとしたと
 きに無理が生じるのではないのでしょうか。絵引編纂にお
 いても、図像資料を文字資料と結び付けて分析する方も
 いれば、図像資料を図像として読み取るようにする方も
 いますが、文字資料を排除するのではなく、非文字資料の
 もつ特徴を如何に既存の研究に取り入れていくのかを考
 察すべきだと思います。人類の文化遺産の中には、非文
 字資料のみに、時代の証言が残されているものもありま
 すが、それと同時に、文字情報をより効果的に盛り上げ
 るための非文字資料もあります。例えば、『絵巻物による
 日本常民生活絵引』のすべての資料は、ご存知のように、
 中世の絵巻物ですが、ここでの非文字資料の役割は文字
 情報を盛り上げるために、もしくは、はるかに効果的な
 方法で表すための、もう一つの手段でもあります。あ
 まり非文字資料を強調してしまうと、資料としての非文
 字と文字の協演に不協和音が生じてしまうのではないで

しょうか。

的場 文字資料の人が図像学を勉強すればいいのではな
 いでしょうか。要するに対象が非文字であればそれにし
 たがって研究手法も変わる。その対象にしたがって自分
 も変化していく。共同研究というのは自分の研究手法も
 変化することですよね。自分の研究スタイルが絶対変化
 しないとはいえない。相性がどうこうでなくて自分の研
 究が変化する。逆に相手のほう、図像学の研究者も文字
 資料を検討する場をつくるべきです。だから3人でやりな
 さい、4人でやりなさいと一つの対象項をばらばらに区分
 すると、討論もしないで別々の方法で研究が進んでしま
 います。これを変えていくというのが共同研究の意味で
 すよね...

北原 このプログラムは非文字資料が売りなんですよ。
 でもそれは文字を排除してではなくて、歴史研究の中
 では文字研究が基本的な領域を占めていますが、そうでは
 なくて非文字という範囲から問題を見たらどう見えるの
 かというふうに理解しております。だから必ずしも非文
 字を排除しているわけではないんですけども、無視され
 ている、あまり意識的に扱ってこなかった領域を基本に
 据えると何がわかるのかという設定だろうと理解してい
 ますので、この非文字という新しさ、キャッチフレーズ
 として考えるといいのではないですか。

大里 前回のシンポジウムは定義づけをするような題で
 「非文字資料とは何か」というテーマだったんですが、今
 回は私たちの課題を明確にするために「非文字資料から
 人類文化を読み解く」という決意をこめたテーマにしま
 した。ですから、各セッションで報告する皆さんには、
 自分たちの調査研究から、このようなことが読み解けた
 ということを知りやすい形で明らかにしていただきたい
 いし、さらには、それぞれの報告のエッセンスを取り出
 し共有化できる視点を確認することで、「非文字資料の体
 系化」といういささか持て余し気味の課題に近づく一歩
 にして、来年に予定している第3回のシンポジウムに引き
 継ぐことにしたいと思います。今回のシンポジウムで活
 発な議論が展開されるよう、そして多くの人に参加して
 いただけるよう、実施委員会としてこれからの準備に取
 り組んでいきますので、よろしく。